

しつとりと吸い付くような肌触りの良さに、感嘆のあまり撫で回していたフランスは、ようやく我に返ったイギリスに手を叩かれた。

「触んなつ！つか、離しやがれ、このハゲっ！」

手の中から脱出しようともがくイギリスに、イラつとしたフランスは反射的に言い返す。

「ハゲてないし！てか、中身はやつぱイギリスなんだね、あく残念すぎる」

「うるせえー！この■■■■っ！」

可愛い容姿で汚いスラングを吐き出すイギリスに、更に残念な顔に変わったフランスは、問答無用で口元を抑えた。

「その姿でそれはないでしょ、マジでやめて」

数本の指で口元を塞がれても、まだ、もがもがと文句を続けるイギリスだったが、内容までは分からない。

そして、再起動するよりも先に目を回しそうだったスペインは、プロイセンの手の平を両手で押しのと、大きく胸を張った。

「やめてえ〜や！親分、これでもオオカミなんやで」

両手を腰に当ててドヤ顔するスペインに、ますます口元が緩んだプロイセンは、問答無用で頬ずりし始めた。

「かわええええっ〜っ〜！」

「ちよつ、マジでやめ〜や〜、酒臭えええええ」

涙声で叫ぶスペインは、大きな尻尾で顔を叩きながら身を反転させると、真っ直ぐイギリスを指さした。

「お前、急に何すんねん！またこんな姿にしよって、はよ戻せやつ！酒飲まれへんやろ」

「問題はそこなの？」

思わずツッコみを入れたフランスから、軽々とテーブルの上に飛び降りたイギリスは、改めて自身の姿を確認していた。

「俺だつてわけ分かんね〜よ！何もしてね〜のに、何で急にこんな〜」

酒と混乱で思考回路が鈍っているイギリスは、再び伸びてきたフランスの手から逃げるように、軽やかにテーブルの下へ飛び降りた。

脚力はウサギらしく、多少の段差など気もせず、床に転がっているグラスを、一生懸命覗き込んだ。

まだ少し残っていたスコッチは、氷と共に床に散らばっているが、妖精のたぐいは見当たらない。

原因が分からず頭を捻っている隙に、静かに伸びてきた手に、ふわりと優しく拾い上げられた。

それは、先程まで一言も発していなかった日本だった。事態を黙って眺めていた日本は、零れんばかりに目が輝いていた。

「K・A・W・A・I・I！」

危険を察知するよりも早く、簡易的に片付けられていたテーブルの一角に降ろされると、続けざまに、プロイセンからスペインを取り上げた日本は、隣に立たせる。

「素敵です！最高ですなっ！」

異様に輝いた瞳と、荒い息遣いの日本は、完全に暴走モードに突入していた。

そして、早業のあまり、どこから出てきたかも分からないデジカメを向けられた途端、シャッター音が乱舞していく。

「お二人ともステキです！視線はこっちに！」